

『タイタス・アンドロニカス』イギリス公演報告

取材・文：鴨澤章子

今日の公演の演出家であったことが僕は嬉しい

2006年6月16日。ロイヤル・シェイクスピア・シアターは、興奮に包まれていた。彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督である蜷川幸雄演出のプロダクション『タイタス・アンドロニカス』の、イギリスでの初日公演が行われたのだ。観客や出演者たちの生の声を交え、素晴らしい一夜をレポートする。

「これは、衰退する帝国を描いた、輝きを放つ哀調を帯びたプロダクションだ」（ガーディアン紙）
 「スタンディングオベーションを受けて当然の作品だ」（ストラトフォード・ヘラルド紙）
 「ニナガワによって蘇ったこの作品は、現代においても、残酷で危険な世界が脈々と続いていることを、私たちに知らしめる」（ザ・タイムズ紙）



初日を前に、公演の行われた劇場前で、蜷川幸雄と出演者ら。

『タイタス・アンドロニカス』のイギリス公演初日が終わったとき、誰もがその成功を確信したに違いない。熱心な拍手、観客一人一人が自らの意志を示すスタンディングオベーション……そして、劇場中を包み込むなんとも言えない興奮と熱気。作り手と受け手の気持ちが一体となって、初めて作品が完成する瞬間に立ち会った喜びで、それは生み出されたものだ。

今回の公演は、シェイクスピアを中心に上演する劇団として活動するロイヤル・シェイクスピア・カンパニー（以下RSC）が、今年1年間をかけて、シェイクスピアの全作品を上演する、「ザ・コンプリート・ワークス」に招聘されたものだ。2004年に彩の国さいたま芸術劇場で初演した『タイタス・アンドロニカス』を、今年4月に同劇場で再演、地方公演を経てこの日を迎えたもので、RSCの上演を始め、欧米の作品が並ぶ中で唯一上演される日本の作品だ。

かつて、『リア王』や『ペリクリーズ』を始めイギリスでの公演を多く経験してきている蜷川にとっても、RSCのこのプログラムの中での上演に対しては、特別な思い入れがあったようだ。日本的な演出に頼らず、日本語による上演（英語の字幕付き）、シェイクスピア作品の中でも上演されることの少ない演目という、難しい条件下での挑戦だった。

「talk・talk・talk」第1回 麻実れい×小栗旬×蜷川幸雄

イギリス公演に先駆けること、2ヶ月前。彩の国さいたま芸術劇場で幕を開けた『タイタス・アンドロニカス』のアフタートークに、演出と出演の三者が登場。満員の観客を前に、『タイタス〜』制作秘話から、イギリス公演にかける意気込みまでを語った。

この芝居は大変なエネルギーが必要

小栗（以下O） 今回、『タイタス〜』では、初演をやられている方たちの中に再演組として入っていくという所からのスタートだったので、僕を含め初めての人たちにとっては、そのエネルギーは大変なものだったと思います。最初の一週間ぐらいは本当に寝られなかったし、今までで一番エネルギーを使いました。

麻実（以下A） 私たちは再演だったけれど、出演者が半分近く変わり、動きも変わったということで、再演を引きずらないで、初演と思い、みんなまで一つの物を作り上げるという気持ちでした。

蜷川さんに「（この演技で）大丈夫ですか」と何度も伺いに行きましたが、蜷川さんに「大丈夫だよ。また気が付いたことがあったら言ってあげるからもう大丈夫だよ」と言ってもらっても、まだ聞いていました。だから同じだよな。

O そうですね。蜷川さんの芝居に出るとのことはずごいエネルギーを使うということですね。

蜷川（以下N） 本当にそうなんだ。

O でも、こういう場を用意してくれた蜷川大先生に非常に感謝しております。

N うるせえよ。（笑い）

A 蜷川さんの稽古場は非常に厳しいのです。噂通りでは全然ないですが、いい意味で厳しくて、とっても愛情があって、とても笑いが多く稽古場です。一度参加した者たちはみんな「また蜷川さんの緊張ある稽古場に参加したい」と思うのです。

N そうだといいですね。噂だけ聞いて、物をぶつけるから絶対イヤだという人もいるのですよね。最近はずつけないよね。（笑い）

最初から、ほぼ連日日本番のような稽古をしているから大変でしたな。

A 集合日から世界が出来上がっているから、役者はまず緊張からです。



N そうだ、即、立ち入り稽古でしたね。

A 即でしたね。本読みナシでしたね。

N 普通は再演でも新しい出演者がいるから一回は本を読んでその人がどういう演技をするのか、どういう声を出すのかということを探るのですが、今回、それは無駄なことだと思って顔合わせでみんなを紹介し、そして「じゃあ、立とう」と言ったわけですが、それはみんながショックを起こすような出来事だったわけです。すごい緊張が走って、そして稽古のレベルが上がっていくわけです。そういうことがフェアかどうかは別として、ある緊張感でやるとだいたい10日は稽古をした分ぐらいからスタートになるが、それはとってもよかったと思います。

でも、大変だったでしょう。

O はい、初日はずっと心の中で、「俺のセリフまで来るな。来るな」と思っていました。でも本当にこのような枠組みの中で初日から稽古ができ、そして自由にやらせて頂けるのですが、「お前らが今まで勉強してきたものであったり、培ってきたものをまずここで見せてみる」という所から始まって、自分たちにいろいろなことをどんどん考える状況を作ってくれる稽古なので、やはりすごくやり甲斐があるし、こういう稽古はそんなじゃないと思います。世間で「怖い蜷川さん」と言われていますが、そんなことはないですよな。

現代に通じる問題提起とメッセージ

N この芝居はすごく残酷な芝居なのです。だから、なだらかに始まっているとこの戯曲の世界に入っていけなくなってしまいます。

何年前に、イスラエルとパレスチナで芝居をやると思ってイスラエルに行きました。パレスチナのガザの町では、荒れ狂っている若者たちがトラックを乗り回しながら

初日の観客たちの反応は、舞台が始まったばかりの段階では、素早いものではなかった。物語自体が広く知られたものでないため、字幕を追うのに忙しかったためもあるだろう。しかし、復讐の図式が明らかになるにつれ、観客の集中力がどんどん高まるのが手に取るようにわかった。盛大な拍手が起こった一幕の終わりを経て、二幕には凄惨な話の中でありながら、笑いも起き、フィナーレまで舞台も客席も緊張感は途切れなかった。そして割れるような拍手。観客の感動はもちろん、演じた側にもストレートに伝わった。

力強く、けれど人としての弱さも併せ持つ複雑なタイタス像を演じた吉田鋼太郎は言う。

「前半は無我夢中でしたが、途中からお客さんの手ごたえを感じました。最後は本当のスタンディングオベーションをいただくことができて、夢がかないました」

カーテンコールで、多くの人からスタンディングで演技を賛美された、エアロン役の小栗旬も、「もう鳥肌が立ちました。とにかく楽しかったです」と嬉しさを隠さない。

シェイクスピア作品の見上手が多い観客は的確な言葉で、この作品を評してくれた。

「演劇の長い伝統のある日本が、シェイクスピア作品に、新しい解釈を与えてくれた」

「ビジュアルの表現が素晴らしい」

その夜、蜷川は関係各者を前に静かに、けれど感動を添えてこう言った。

「今日の公演の演出家であったことが僕は嬉しい」

すでに前日の舞台稽古の時から、確かな手ごたえを感じていたという蜷川に対し、この夜を経験した誰もが、今日の観客であったことを感謝しただろう。



そう考えると芝居のスタートは決してなだらかでなく激しいものだということが自分の中にあり、劇の冒頭の所の凱旋で帰ってくることでか、捕虜を虐めるのも、全くテレビ報道などで見る現代の戦争、あるいはそれに付随したドキュメンタリーとほぼ同じことをやっているのです。

私はこの芝居で、そういう世界の中を現代シーンに追認するという形だけでなく、そこから希望というものを発見できないだろうかと考えました。そして芝居の最後で少年が叫び声をあげる、その一点に掛けました。新しい解釈はそこにあります。それが現代に対する我々全員の希望であり、少年が黒人の子供を抱きしめて、世界に怒りの叫び声をあげる。そのことをきちんと提示することがこの芝居の責任と思いました。

イギリスで上演する怖さと意義

N 我々がやってきた仕事が、埼玉からストラトフォード・アポン・エイボンまで行き、そのシェイクスピアの「ザ・コンプリート・ワークス」の中に置かれることによって、我々自身の普遍性を問うことができるのではないのでしょうか。我々がここでやっている仕事は世界の演劇シーンにおいて本当に説得力と普遍性があるのかということと同時に問う作業でもあると考えていました。

A 本当にイギリスにこれを持っていけるということは私たちにとってもいい意味で大変緊張します。やはり日本のプロダクション、選ばれた日本の役者がどれだけのパワーをイギリスの方にお見せできるかは大変興味があるよね。

O はい。

N やっぱ緊張する？ イギリスでやると。

A 緊張しますよね。

O もう、緊張しますよね。

イギリスの主要各紙でも、劇評が掲載された（左・「The Guardian」紙 右上・「The TIMES」紙）

彩の国シェイクスピア・シリーズ 第16・17弾公演決定 速報

大好評シリーズの次回作がついに決定。ローマ史を題材とした悲劇『コロレナス』とオールメール・シリーズ第3弾の喜劇『恋の骨折り損』です。蜷川演出のシェイクスピアの悲・喜劇、両方の魅力を味わうチャンス。出演者も強力キャストを予定しています。どうぞご期待ください。

第16弾『コロレナス』
 2007年1月23日（火）～2月8日（木）〈予定〉
 [会場] 彩の国さいたま芸術劇場大ホール
 [演出] 蜷川幸雄 【作】W・シェイクスピア 【翻訳】松岡和子

第17弾『恋の骨折り損』
 2007年3月16日（金）～3月31日（土）〈予定〉
 [会場] 彩の国さいたま芸術劇場大ホール
 [演出] 蜷川幸雄 【作】W・シェイクスピア 【翻訳】松岡和子

[チケット発売] 『コロレナス』10月頃予定
 『恋の骨折り損』11月頃予定
（財団メンバーは、別途8月送付の案内にてプレオーダー実施予定。財団メンバー特典等は、本誌P23をご参照ください）



photo:幸田 森 構成:鴨澤章子